

クナシロ・メナシの戦らびんらび(2)

はじめに

今回も前回同様、新井田孫三郎が残した「寛政蝦夷乱取調日記」から、「ちうるい」(忠類)でアイヌ民族の襲撃を受けた飛騨屋の船「大通丸」に乗船し、かろうじて生き延びることのできた水主(船員)に対する、閏6月15日に行った取り調べについて見てゆきます。

この取り調べは、新井田孫三郎以下「八名」が「列座」して、「南部大畑湊村」の「庄蔵」、「年三十三歳」に対して行われ、「庄蔵」の「口書」(事件の供述)が記されています。今回は、3回の襲撃の後、一人生き残り「ちうるい」の長人の子セントキらに助けられ、浜に連れられて行くまでです。

1 回目の襲撃

大通丸は14人乗りで、船頭ら2名は運上屋に居て、残り12名が船中に居たところ、5月13日の夜明けに「夷舟四拾艘程」が取り囲み騒いだので、手棹であしらうと、弓を射ってきたので、戸窓を差しました。「蝦夷共」は、船中に入り込んで、ますます騒いだので、「物取のおどし」と「心得」で、相談して「龜の甲」(雨を防ぐ板囲い)の下に残らず隠れ、前に樽を積んで置きました。

しかし、「夷ども」は舟中を残らず探したて、「龜の甲」の内を槍で突きました。樽がこれを防いだので、「龜の甲」の上を「鏑」(手斧)で破り、そこから槍を「六、七本突込」、さらに弓を射ったので、六人が死にました。その後「蝦夷共」が荷物を奪って帰って行ったので、私は深手を負っていました。私でしたが、「人音」がしたので立ち上がり「艦」(船尾)へ行くと、「無事成者五人」が居りました。

2 回目の襲撃

水を呑みたくなったので「はづ」(船底にある貯水槽)を壊しましたが、少しも水はなく、手桶に水が少しあったのでこれを呑んでいると、「又夷とも大勢の音」がしたので、自分は「死人の上へ臥」、顔に肌衣を掛けて、死人の「躰」をしました。「夷共」は「鎧先」で肌衣を取り、「鏑」で腹をなぶり見て、「此者」は死んでいると言つて、「艦」(船尾)へ向かい、「はづ」の中に三人隠れているのを「見付出し、上から「鏑」で「ヤアツト」一声叫び突きました。他の一人は死人の下に居てみつきり、「鎧拾本程突通」され死にました。

さらにもう一人は帆の中に居ましたが、海に飛び込み海で突き殺されました。それから舟中の荷物を奪い取り、「夷共」は帰って行きました。

3 回目の襲撃

自分は死人の中より「立

出」て、舟底にあった「粕」(魚油を採った残滓「カス」の肥料)を10俵ほど切りほどいて、その下に板を敷き、その板の下に隠れていると、また大勢船へ乗り込み、舟中を「叩立」、帆を切り取り、荷物を積んで帰って行きました。

舟一艘に女夷三人、オツカイ三人

しばらくして、舟一艘に「女夷」三人とオツカイ(少年)三人が乗ってきて、その内オツカイ三人が船に乗り込み、粕を「片付」ていたので自分も粕から出ると、

一人は海に飛び込み、もう一人は「夷舟」に戻ったので、残った一人を取り押さえ、「何卒岡」に連れて行ってくれるよう頼んでみましたが、言葉が「不承知」であったので、「夷とも」と帰らせました。

そうしていると、また「夷舟」が来て、「ちうるい」の長人の子セントキとその弟、さらに「ウタレ」(仲間)三

人の合わせて五人が「シャモ シャモ」(シャモ、アイヌ語で和人の俗称)と呼んでいるので船から出てみると、五人の乗った船に乗せられ浜へ連れて行かれて、彼らが私に尋ねるには、「此所のシャモに一家親類」はいるのかと言つので、私は一人もいないし顔は覚えていないが名前もろくに知らないと答えました。また尋ねるには、「其方は何れの者」と言つので、「松前箱館者」と答えると、「左様ならば宜」と言いました。

(次回に続く)

